

高大接続改革情報 ▶▶ 第2回

このコーナーでは、高大接続改革を検討する文部科学省の「高大接続システム改革会議」の動きを中心に、高大接続改革に関する動向をお届けする。4～5月の間は、非公開の「新テストワーキンググループ」が数回行われ、公開されている「高大接続システム改革会議」は4月23日に第2回会議が開催された。今回は、第2回の内容を中心に紹介する。なお、ここで取り上げている話題は現在進行形の話であり、その時点の情報であることにご留意いただきたい。

大学入学者選抜で評価すべき3要素と それに対応する評価方法についての枠組みを提示

第2回会議の主な議題は「一貫した高大接続の在り方について」と「個別選抜の改革の推進方策について」であった。

会議では「高大接続改革の全体イメージ」として<図表1>の素案が示された。大学で育成すべき人材像に基づき、どのような能力を身に付ければ学位を授与するかを示すディプロマ・ポリシー（以下、DP）、DPをもとにどのような教育を行うのか、カリキュラムの編成方針を明確にしたカリキュラム・ポリシー（CP）、そして、DP・CPに基づいた大学教育を行うために、どのような入学者を受け入れるのかを明示するアドミッション・ポリシー（AP）を明示しようとするものだ。

APについては、①知識・技能、②思考力・判断力・

表現力等、③主体性・多様性・協働性の3つについて、各大学で具体的にどのような能力を、どのようなレベルで求めるのかを明確にすべきとしている。

これらの3要素を評価する方法として提案されているのが、「ア 大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」「イ 記述・論述式問題（自分の考えに基づき論を立てて記述する形式の学力評価等）」「ウ 高校時代の学習・活動」「エ エッセイ、大学入学希望理由書、学修計画書」「オ 面接、集団討論、プレゼンテーション」である。これらの方法から、活用する評価方法・比重と要求するレベルを各大学が決めて、APとして公表することを求めている。

各大学の個別選抜を多面的・総合的な評価に改善するための論点の整理

もう1つ示されたのが、各大学の個別選抜を改善するための方向性である。今後、各大学に求められるのが、

<図表1> 高大接続改革の全体イメージ（素案）



※高大接続システム改革会議（第2回）資料より

APに<図表2>の1のような具体的な内容を盛り込むこと、個別選抜をより深い思考力・判断力・表現力等を評価できる手法へと改善することである。

おそらく、アドミッション・オフィスを中心として、多面的・総合的な評価を行うためにどのような方法が良いのか、例えば面接を行うのであれば評価方法の開発なども行う必要があるだろう。しかし、アドミッション・オフィスを担う専門の人材の育成も、人材を採用するための費用も十分ではないのが現状である。そのため、国としても個別選抜の改革を行う大学に対して、財政的な支援をすることを今後検討する予定だ。

なお、図表1、2とも、文部科学省から説明があっただけで、第2回会議で具体的な検討がされたわけではない。今後、検討が進む中で変わる可能性がある。現時点での検討事項・論点としてご覧いただきたい。

▶ 東北大学、九州大学、早稲田大学、追手門学院大学の入学者選抜を説明

さらに4大学の個別選抜の改革事例が発表された。

特に注目されるのは「多面的・総合的な評価」の例として紹介されたと推測される東北大学のAO入試、九州大学のAO入試、追手門学院大学の「アサーティブプログラム、アサーティブ入試」の取り組みである。

今後の大学入学者選抜の改革の方向性を示すような発表であったが、一方で、課題も指摘された。例えば、東北大学の発表では、今後AO入試で選抜する定員を現状の18%から数年かけて30%に増やしたいという意向や、説明責任として、現在公表していない出願書類、小論文試験・筆記試験、面接試験、大学入試センター試験などの点数配分を公表する（一部学部を除く）といった内容とともに、それらを行うには実施主体である学部教職員の負担が大きく何らかの支援が必要であることや、APの見直し、入試成績の情報公開が課題として挙げられた。

九州大学の「21世紀プログラム」の発表では、第2次選抜として1日目は「講義・レポート」、2日目は「グループ討論、小論文、個人面接」を行っているが、試験場施設の関係から書類審査による第1次選抜を行い、第2次選抜では受験者を定員の3倍程度としていることが説明された。追手門学院大学の「アサーティブプログラム、アサーティブ入試」^(注)にはいろいろな部局から集まった約50名の職員が関わっているそうだ。

<図表2>各大学における個別選抜を「多面的・総合的な評価」に改善するための改革に係る主な論点（案）

<p>1. アドミッション・ポリシーの法令上の位置付け、各大学における内容の明確化</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ アドミッション・ポリシーを、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーと一体的なものとして法令上位置付けることについて。 ○ アドミッション・ポリシーに関するガイドライン（平成27年度中に策定予定）において、各大学のアドミッション・ポリシーに具体的に盛り込むよう促す内容について。 <p>（例）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学として具体的にどのような力を持つ学生を受け入れたいのか。 ・平成26年12月中央教育審議会答申において学力の要素として特に重要と指摘されている以下の三つの要素について、具体的にどのような能力をどのレベルで求めるのか。 ア 知識・技能 イ 思考力・判断力・表現力等 ウ 主体性・多様性・協働性 <p>上記の三つの要素を適切に評価するため、以下に示すような方法の中から何を選択し、どのようなレベルを要求し、どのような比重を置いて評価するか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ア 「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」 イ 記述式や論述式の問題 ウ 高校時代の学習・活動歴に関する資料 エ エッセイ、大学入学希望理由書、学修計画書 オ 面接、集団討論、プレゼンテーション
<p>2. 多様な背景を持つ者を受け入れるための多面的な尺度による評価の促進</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 例えば、次のような多様な背景を持つ者が、より適切に評価される多面的な選抜の仕組みを作ることについて。 <ul style="list-style-type: none"> ・科学や芸術などの特定の分野で卓越した才能を有する者 ・地域に貢献したいとの意欲を有する者 など ○ 生徒の多様な学習成果や学習活動の評価を反映するための調査書等の改善の在り方について。
<p>3. 個別選抜の手法の改善（より深い思考力・判断力・表現力等を問う手法への転換等）の促進方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 個別選抜について、より深い思考力・判断力・表現力等を評価する観点から、記述式や論述式などを重視した手法への改善を図ることについて。 ○ 個別選抜の手法や意図等を公表するなど、各大学が入学希望者や広く社会に対して説明責任を果たすことについて。
<p>4. アドミッション・オフィスの整備・強化の在り方</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 多面的・総合的な評価を行うためにアドミッション・オフィスに求められる機能について。 ○ アドミッション・オフィサーをはじめアドミッション・オフィスに求められる専門人材とその育成方法等について。 ○ 面接等の手法や評価方法の開発のための方策について。
<p>5. 個別選抜の改革を行う大学への支援の在り方</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向け、個別選抜の改革に主体的に取り組む大学にとってインセンティブとなる支援の在り方について。

※高大接続システム改革会議（第2回）資料より作成

このように、「多面的・総合的な評価」を行うために大学も多くの手間と人手をかけている。しかし、それにも限界があり、多くの教職員を動員したとしても、試験場の都合や、丁寧な選抜を行うために受験者の人数を少なくせざるを得ないという面も生じる。今後具体的な検討が進む中で、これらの課題を解決するための方策が検討されることを期待したい。

（5月25日現在）

^(注) 「アサーティブプログラム」として、オープンキャンパスも含めて年10数回のガイダンスや個別面談を行う。さらに、マナボスシステムを使った学習を行い、大学入試の前から高校生に大学で学ぶ意味、何を学ぶかなどについて話し合い、生徒が主体的に自分の進路を考え、決定することができるように支援する。そして、「アサーティブ入試」では1次選抜としてグループディスカッションを実施。2次試験では基礎学力適性検査と個人面接を行い、合格者を決定する（第2回会議資料より）。詳しくは大学のホームページ等をご参照ください。